



暑い！台所も暑い！熱い！

そうめんは比較的早めに出て上がりますが

少しでも暑さから解消するためこのようなやり方もあります。

(その1) ふっくらしたお湯の中にパラパラとそうめんを入れる

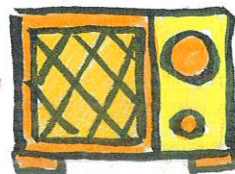
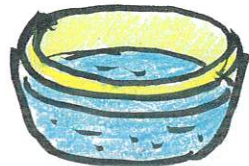


はして、ぐとまわして火を止める

フタをして5分

→ いっつも通りザルにあげて水でぬめりをとる

(その2) 耐熱ボールに水をたっぷり入れる



レンジで10分
(あついで気を付けて)

熱い湯の中にそうめんをパラパラ入れて決める
そしてレンジで2分

夏をのりきるために暑さから逃げる事も大切です。

(クーラーをつける
台所の火の使用時間を少なくする)

理着操痛月下日復



穴埋め漢字

① 無 ↓ 心 → □ → 由 決 → □ → 陸 節 → □ → 縦 陣 → □ → 感	② 到 ↓ □ → 物	③ 体 ↓ □ → 作	④ 頭 ↓ □ → 手
⑤ 満 ↓ 正 → □ → 影 天 → □ → 戸 吉 → □ → 傘 回 → □ → 活	⑥ 以 ↓ □ → 降	⑦ 毎 ↓ □ → 常	⑧ 反 ↓ □ → 習
給	降	常	習

隠れ脱水に注意！

「脱水時に見られる症状」

唇の乾燥

頭痛

めまい
たちくらみ

眠気
疲労
だるさ



のどが乾く
口の中が
ねばつく

足がふる

尿量が減る
尿の色が濃くなる

上記のような症状が1つでもあれば
隠れ脱水かもしれません。

脱水を疑うチェックポイント

握れる	▶ 手足が冷たい
舌のチェック	▶ 乾いている
皮膚をのぞく	▶ 1秒以上戻らない
歯の先を押す	▶ 赤味が戻るのが遅い(2秒以上)
わきの下の汗	▶ 湿っておらず乾いている



ホームページはこちら！

花火の歴史

(中国) 起源は諸説ありますが一般的には花火のルーツは古代中国の狼煙(のろし)とされ、煙による通信手段であり、火薬の技術の発達とともに花火が誕生することになったそうです。



(ヨーロッパ) ヨーロッパに伝わったのは13世紀以降で、初期のものは視認の音を大きくしたり、煙に色などがつくようにしたりしたものだったと考えられるようで、鑑賞用の花火は14世紀、イタリアのフィレンツェに始まるとされ、キリスト教の祝祭で用いられる人形に口から火を吐く仕掛けのために用いられたとされています。

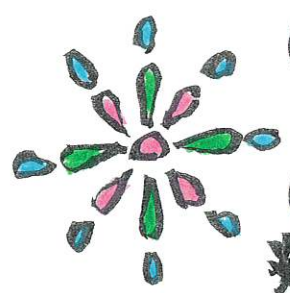
(日本) 日本における花火の最古の記録としては、室町時代の公家万里小路時房の日記「建内記」に記されている淨華院における法事後に境内にて「唐人」が花火と考えられる「風流事」を行なったという記事が確認されています。この時代は足利義満の死後途絶えていた日明貿易が足利義教によって再開されており、花火も大陸から持ち込まれていたとも考えられています。

鍵屋初代将兵衛は大和国情原(奈良県)出身で、年少の頃から花火作りに長けていたそうで、両国横山町に店を構え「鍵屋」を屋号として代々世襲するようになり現代に続いています。

鍵屋と並んで江戸の花火を代表したのが玉屋です。玉屋は六代目の鍵屋の手代であった清吉が1810年に暖簾分けをして、市兵衛と改名の上両国広小路吉川町に店を構えたのが始まり。「玉」と「鍵」はどちらも狐が守護する物で、江戸ならではの家号であったようです。

二大花火師の時代を迎えるようになった江戸では、両国の川開きは両国橋を挟んで上流を玉屋、下流を鍵屋が受け持つようになり、「た〜まや〜」「か〜ぎや〜」というかけ声が生まれました。当時の浮世絵を見ると、玉屋の花火は多く描かれており、また「橋の上、玉・玉の声ばかり、なせ下・鍵やといわれぬ情なし」「備と鍵屋の聲」をかけた狂歌や、「玉屋だ、またぬすめと鍵屋いい」という川柳が残っていることから、玉屋の人氣が鍵屋を上回っていたと考えられます。しかし1843年玉屋から失火、半断ほどの町並みを焼くという騒動があり、当時失火は重罪と定められており玉屋は財産没収、市兵衛は江戸を追放され僅か一代で家名断絶となってしまいました。

おもちゃ花火



購入と使用に免許が不要な花火の総称。
(ネズミ花火) 火薬量1g以下かつ爆薬の1g以下炎を吹き出すタイプのちも状の花火を円形に組んだもの。地面に置くと高速で回転し地面をはい回る円形の炎がジュジュッと音を立ててはい回る様がネズミに喩えられたためにこの名がつけられた。最後にパンとはじけるような仕掛けが一般的。

(線香花火) こよりや細い竹ひごの先端に火薬を付けた花火の日本夏の情緒を代表する花火です。

他にもねじ花火や高連で回転するコマ花火、アサギ花火やパラシュート花火、手で持つ打ち上げ花火や煙花火など、子供の頃よく見た思い出があります。お祭りと安全に楽しんでみてはいかがでしょうか...

